

不沈軍艦の見本

——金博士シリーズ・10——

海野十三

青空文庫

さても日本対米英開戦以来、わが金博士は従来にもまして、浮世をうるさがつてゐる様子であつた。

「ねえ、そうでしよう。白状なさい」

と、その客は金博士の寝衣の裾をおさえて話しかけるのであつた。金博士が暁の寒冷にはち切れそうなる下腹をおさえて化粧室にどびこんだとたん、扉の蔭に隠忍待ちに待つてゐたその客は、鬼の首をとつたような顔で、金博士の裾をおさえて放さな

いというわけである。

「これこれ、そこを放せ。早く放さんか。一大爆発が起るわ。この人殺しめ」

博士は、身ぶるいしながら、鍋のなべのお尻のように張り切つたる下腹をおさえる。客は、そんなことには駭く様子もなく、

「大爆発大いに結構。その前に一言でもいいから博士直々の談を伺いたいのです。すばらしい探訪たんぽうニュースに、やつと取りついたのですからな。さあ白状なさい」

「なにを白状しろというのか、困った新聞記者じや」

「いや私は、録音器持参の放送局員です。博士から一言うかがえばよろしい。あの赫かつかく々たる日本海軍のハワイ海戦と、それから

あのマレイ沖海戦のことなんですか

「そんなことをわしに聞いて何になる。日本へいつて聞いて来い。おお、ええ加減に離せ。わしは死にそうじゃ」

「死ぬ前に、一言にして白状せられよ。つまり金博士よ。あの未曾有の超々大戦果こそ、金博士が日本軍に対し、博士の発明になる驚異兵器を融通されたる結果であろうという巷間の評判ですが、どうですそれに違いないと一言いってください」

「と、とんでもない」

と金博士は、珍らしく首筋まで赧くして首を振った。

「と、とんでもないことじや。あの大戦果は、わしには全然無関

係じや。わしが力を貸した覚えはない」

「金博士、そんなにお隠しにならんでも……」

「莫迦。^{ばか}わしは正直者じや。やつたことはやつたと^{いうが}、いくら訊いても、やらんことはやらぬわい。これ、もう我慢^{がまん}が出来ぬぞ、この殺人訪問者め！」

大喝^{だいかつ}一声^{いっせい}、金博士は相手の頤^{あご}をぐわーんと一撃やつつけた。
とたんにあたりは大洪水^{だいこうずい}となつたという暁の珍事^{珍じ}であつた。

というようなわけで、あれ以来博士は、あられもない濡衣^{ぬれぎぬ}をきせられて、しきりにくすぐつたがつて^{いる}。かの十二月八日の博士の日記には、いつもの大記載^{だいきさい}とは異り、わずかに次の一行が赤インキで書き綴^{つづ}られているだけであつた。もつて博士の驚^{きょう}

愕^{がく}を知るべし。

“流石儂亦顔負也矣！ 九排日本軍將兵先生哉！”

とにかく愕^{おどろ}いたのは金博士ばかりではない。全世界の全人間が愕^{おどろ}いた。殊に最もひどい感動をうけたものは、各国參謀軍人であった。あの超電擊的地球儀的広汎^{こうはん}大作戦が、眞^{しんじつ}實に日本軍の手によつて行われたその恐るべき大現実に、爆風的圧倒^{おぼ}を憶^{おぼ}えない者は一人もなかつた。

（いや、今までの自分たちの頭脳は、あのような現実が存在し得ることを感受するの能力がなかつたのだ。今にしてはつきり知る、自分たちの頭脳は渝いも渝つて発育不全であつたことを！ ああ情けなや）

と、彼らの多くは、それ以来すっかり気力を失つて、右向け右の号令一つ、満足にかけられないという始末であつた。

その後一ヶ月を経て、彼らはようやく正氣らしいものに立ち帰つたようである。その証拠には、あれから一ヶ月程してから、彼らはしきりに忙しそうに仕事を始めたことを以て窺うことが出来る。

但しその仕事というのが、ちと奇抜すぎはしないかと思われる種類のものであつた。彼らは、どこから手に入れたか、机上に夥しい文献を積み上げて、一々それを熱心に読み且つ研究を始めたのであつた。

その文献なるものを、ちょいと覗いてみると、曰く「世界お伽と

「嘶ぎばなし、法螺ほら博士物語」、曰く「カミ先生きたんしゅう奇譚集」、曰く「特許局編纂へんさん——永久運動發明記録全」、曰く「ジーメンス研究所こだいもうそうはん誇大妄想班しゃないし報告書第一輯乃至第五十八輯」、曰く「世界ふうてん瘋癲ぎょうせ病患者もうそうようしるいじゅう妄想要旨類聚しんせいねん」、曰く「新青年しんせいねん——金博士行蹟ぎょうせき記」、曰く「夢に現れたる奇想集」等々、一々書き切れない。

この奇妙なる文献の山と、彼らのくそ眞面目な顔とを見くらべて、もしや彼らが十二月八日をショツクとして云いあわせたように気が変になつたのではないかと疑念ぎねんを抱かせるものがあるのであつたが、二三の者に小当りに当つてみた結果によると、変になつたわけでもないらしい。そして彼らの整理簿の上には、これまた云いあわせたように、次の如き格言かくげん様ようの文句が見やすきとこ

ろに大書されてあつた。すなわち、

“世の中に、真に不可能なるものは有り得ず。ナポレオン”

又曰く、

“不可能なるものこそ最も恐るべく、且つ大警戒すべし。フランキー・ルーズベルト”

2

そのフランキー・ルーズベルトであるが、彼は十三月八日（十

三月は誤植ごしょくにあらず、アメリカでは一九四一年の大惨敗だいざんぱいを記念するため従来の如く十二月末日を過ぎても年号を改めることをなさず、その後は一九四一年十三月、一九四一年十四月、エトセトラというが如く同じ年号でつづけていくこととなつた。だから十三月というは、歐洲でいう一九四二年一月のことと思えばよろしいのである）——その十三月八日において、彼ルーズベルトは、彼の特使を、かの金博士に面会さすべく遂ついに成功したのであつた。

「わしはルーズベルトは嫌いだよ。あいつはわしの大嫌いな人間じやからな」

金博士は、最初の一撃でもつて、特使をごつんとやつつけた——

一つもりであつた。しかし最初の一撃には、既に体験ずみのアメリカ人のこととて、かの特使はくらくらとしながらも首をたて直し、

「そのことはまた別の機会にゆつくり弁明することにいたしまして、ねえ金博士、わが大統領は、博士において今回お願ひの一件さえお聴届け下されば、次のアメリカ大統領として、金博士を迎えるに吝ならぬといわれるのです。どうです、すばらしいではありますか、あの巨大なるドルの国の大統領に金博士が就任されるというのは……」

「この上海では、弗は依然として惨落の一途を辿つてゐるよ。今日の相場では……」

「ああ、もうし、ちょっとお待ち下さい。この件を御承諾ごしょうだく下さいますならば、シカゴの大屠殺場だいとさつじょうに、新に大燻製工場あらただいくんせいこうじょうをつけて、博士にプレゼントするとも申されて居りますぞ」「あほらしい。シカゴは既に日本軍の手に落ちて、自治委員会が出来ているというじゃないか。お前さんは、わしを偽瞞だましに来なすつたか」

「ど、とんでもない。ええとソノ、私の今申しましたシカゴというは、元のシカゴではなくて、今回ユータ州に出来ましたるヌー・シカゴのことです。そのヌー・シカゴの大屠殺場に……」「これこれ、空虚なる条件をもつて、わしをたぶらかそうと思つても駄目じや。もう帰つて貰いましょう」

「空虚というわけではありませんぞ。わが大統領も、全く以て真剣なんです。その証拠には、ここに持つて参りましたる燻製見本を一つ御風味ごふうみねがいたい。これはわがアメリカ大陸にしか産しないという奇獸きじゆうノクトミカ・レラティビアの燻製くんせいであります、まあ試みにこの一片へんを一つ……」

と、特使は、隠し持つたるフォークとナイフを電光石化でんこうかくせつかと使いわけて、あやしげなる赤味をおびた肉の一片を、ぽいと博士の口に投げ入れるなれば、かねて燻製くんせいものには嗅きゆう覚かく味覚みかくの銳敏えいびなる博士のことなれば、うむと呻うなつて、思わずその一片を口の中でもぐもぐもぐとやつてみると、これが意外にも大したしろものであつた。燻製通つうの博士がこれまでに味わつた百十九種の燻

製のそのいすれにも属せず、且つそのいすれもが足許にも及ばないほどの蠱惑的な味感を与えたものであるから、かねて燻製には食い意地のはつたる博士は、卓子の上に載つてゐる残りのノクトミカ・レラティビアの肉を一片又一片と口の中に投り込む。してやつたりと、傍においてにんまり笑つたのは、かの特使であつた。このノクトミカ・レラティビアの燻製肉こそは、力ナダの国境附近の産になる若鹿の肉にアマゾン河にいる或る毒虫の幼虫を煮込み、その上にジーリー会社で極超短波を浴せかけて、電気燻製とし、空前絶後の味をつけたものであつて、この調理法は学者アインシュタインの導き出したものであつた。故にこの燻製肉を一度喰えれば、あたかも阿片において見ると同じ

まひてきしょうじょう きた
麻痺的症状を來し、絶対的人間嫌いが軟化し、相対的人間
嫌いと變るという文字通り苦肉の策を含んだものであつた。果し
てその効果があつたると見え、金博士は 両眼 さえ閉じ呼吸も
つかずに、残余のノクトミカ・レラティビアをフォークの先につ
きさして喰うわ喰うわ……。

「そこで金博士。わが大統領のお願い申す一件のことですが、ぜ
ひとも金博士の 発明力 はつめいりょく を煩わして、絶対に沈まない軍艦を一
隻、至急御建造 せき ごけんぞう 願いまして、当方へ 御下渡し おさげわたり
ります。お分りですか。つまり、いかなる砲弾なりとも、いか
なる 重爆弾 じゅうばくたん なりとも、はたまたいかなる空中魚雷 くうちゅうぎょらい
なりとも、その軍艦に 雨下命 うかめいぢゅう するといえども絶対に沈まない軍艦を

御建造願いたいのであります。一体そういうものが、博士のお力によりお出来になりますか」

これに對して、博士の返答は、もとより聞かれなかつた。しかし特使は、失望することなく、いやむしろ相当の自信ありげに、金博士が怪しき燻製肉ノクトミカ・レラティビアの見本全部を喰べ終るのをしづかに見まもつてゐるのであつた。

卓上の一切を平げ終つたとき、金博士は嵐のような溜息を立てつづけに発したことであつた。

今までに博士が、燻製肉を喰べて、こんな大袈裟な溜息をついたことは一度もなかつた。ということは、恐るべく忌わしき妖毒が、今や金博士の性格を見事に切り崩したその証左と見てもさしつかえないであろうと思う。

「うふふん。じ、實に美味なるものじや。珍中の珍、奇中の奇、あたかもハワイ海戦の如き味じや。うふふん」

と、博士が暫くめに、感にたえたようなことばを吐いた。

「そんなにお気に召すなら、見本として、もつと持参してまいりましたものを」

「そうじゃつたなあ。君も特使のくせに、気の利かぬことじや。

尤もアメリカの軍人というやつは……」

「おつと、皆まで仰有りますな。それよりもさつき申上げた不沈軍艦ちんぐんかんの件ですが、博士のお力で、左様さようなものが出来るでございましょうか。それとも覚束おぼつかのうござりますかな」

特使は、わざと博士の気にきわるような言葉を使う。

「つまらんことを訊きくものじゃない。この世の中にわしに出来ないものなどは、一つもないわ。不沈軍艦ぞ造ろうと思えばわけはない。十ヶ月の猶予ゆうよ期間さえあれば、不沈軍艦ぞ一隻、なんの造ぞ作もなく造つて見せるわ」

と、博士は例によつて、至極じごく事こともなげに言つてのける。

「えええツ」

と、仰ぎょう天てんし、狂きょう喜うきしたのは、かの特使であつた。

「本当にござりますか、それは……あのう、十六吋の砲弾、いや十八吋の砲弾、二十吋インチの砲弾をうちこまれても沈まないのでぞ」

「砲弾をいくらうちこんでも、一つだつて穴あなが明あきはしない」

「えええツ。そいつは豪勢ごうせいですね。いや砲弾ばかりではない。」

空中からして、日本空軍のまきちらす重爆弾が雨下命中したらば、どうなりますか」

「たとえ幾十発幾百発の重爆弾が落ちてこようとも、あとに一つの穴だつて明かない。絶対に大丈夫だ」

「しかし、このとき空中魚雷を抱いだきたる日本の攻撃機數十台が押

し寄せ、どどどつと、空中魚雷を命中させ……

「穴は明きません」

「続いて、果敢なる日本潛水艦隊が肉薄して、数十本の魚雷を本艦の横腹目がけて猛然と発射するときは……」

「大丈夫だといつたら、大丈夫だ。しかし大統領にこういいなさい。たしかに不沈軍艦一隻——しかも排水量九万九千トンというでかいやつを造つてお渡しする。しかしわしは、これを金銭づくりで作つてやろうというのではない……」

「わかつています。燻製肉の一件……」

「いや、燻製肉の代償を欲しているわけでもない。慾心で、それを造つてあげようというのではない」

「すると全面的に、わがアメリカを援助せられて……」

「自惚うぬぼれてはいかん。とにかくこの代償として、わしはルーズベルト大統領がいつも鼻の上にかけている眼鏡を貰いたい。と、そういうひつて伝えてくれ」

「えつ、不沈軍艦一隻と大統領の眼鏡との交換だと仰有るのですか。それは又、慾のない話です。ああわかりました。絵に描いた不沈軍艦を渡してやろうというのでしよう」

「ちがう。わしは嘘そなをいわん。真正しんしょう真しん銘しんめいの九万九千トンの巨艦だ。立派に大砲も備え、重油じゅうゆを燃やして時速三十五ノットで走りもする。見本とはいながら、立派なものじや。あとはそれを真似まねして、それと同じものをアメリカでどんどん建造すればよろ

しい。わしを信用せよ」

「ほ、本当にござりますか。ほほほつ、それはまた夢のようだ。すると、やがてわがアメリカは九万九千トンの不沈軍艦を百隻作つて、太平洋に押し出すのだ。こいつは素晴らしいぞ。では博士、さつそく早速いとまごですがお暇いとまご乞ういをして、きゆうきよ急遽うきよ帰國の上、神經衰弱症ききゅうしゅうりょうの大統領を喜ばしてやりましょうう」

特使は、崩くずれ放ぱなしの笑顔を、両手で抑おさえるようにして、あたふたと博士の研究室を出ていった。

月日のたつのは早いもので、早くも、あれから十ヶ月経つた。
時正に一九四一年二十三月であつた。

ここはワシントンの白堊館はくあかんの地下十二階であつた。その一室
の中で大統領ルーズベルトのひびのはいつた竹法螺たけぼらのような声が
する。

「おい、シモンよ。シモンはいないか」

そこへあたふたと、廊下を走つて、過日かじつの特使シモンが駆けこ
んできた。

「誰だ。おおシモンか。遅かつたじやないか。まだあれは見えな

いか

大統領は、せきこんで訊く。

シモンは、しきりに胸板を拳で叩いていたが、やや鎮まつた
ところで、やつと声を出した。

「ああ大統領閣下。何もかも一どきに到着いたしました」

「え、何もかも一どきにとは？」

「はあ、待ちに待つたる新軍艦ホノルル号が突如ニユーヨーク
沖に現れました。九万九千トンの巨艦ですぞ。いやもう見ただけ
でびっくりします。全く浮城とはこのことです。金博士の実力
は大したものですねえ」

と、前特使シモンは、約束の巨艦が金博士から届いたことを知

らせた。

「ふむ、そんなに大したものかのう。で、さつきお前のいつた何もかも到着というのは、何を指すのか」

「ああそれは、巨艦ホノルル号も到着しましたし、それからもう一つ思いがけなく金博士も到着したことをお話しようと思つたのです」

「なに、金博士も来たか。わざわざ来てくれたとは、いやどうも全く嬉しいじやないか。早速大歓迎の夜会を準備してくれ。燻製肉の方も特に念をいれて、よろしいところを皿に盛り上げて出すようにな」

といつて いるところへ、ハルの案内で、当の金博士がのこのこ

部屋へ入つてきたものである。大統領は愕^{おどろ}いて、ナイトガウンの襟^{えり}をかきあわせながら、ベッドの上から手をさしのべる。

「やあ、ようこそ、わしがルーズベルトです。このたびは、困難なる仕事を、わがアメリカのために引受けてくだすつて、ありがとう。また過日^{かじつ}、金米^{きんべい}会談を通じて、シモン及び余に對して示されたる数々の御厚意に深く感激しとる。さあ、まずそれへお掛け」

ルーズベルトの口調^{くちよう}は、だんだん例の横柄^{おうへい}さを加えてくる。

金博士は、別にそれを気にする様子もなく、安樂椅子^{あんらくいす}の一つに、小さな身体^{うず}を埋めた。

「この沖合^{おきあい}まで、日本軍の目をかすめて持つてくるのに、ずい

ぶん骨を折つたよ。ホノルル号設計及び建造以上に、神経を使つたよ。まあようやくここまで持つてこられて、やれやれじや」

博士は、貰つたハバナ産の太い葉巻を口にくわえて、うまそうに煙をたてる。

「金博士の御心労ごしんろうを謝する。で、そのホノルル号は、果して不沈軍艦であるかどうかということについて、余は如何なる証拠しようこほう

によつて、それを信用なし得るであろうか」

大統領は、例のねちねちした云い方で、金博士に追せまつた。そのとき金博士は言下に応えた。

「わけなしさ、そんなことは。どうか君の手許にのこつていてる主力艦があれば、それを引張りだして、どこからでもいいから、わ

しの持つてきたあのホノルル号を砲撃でも爆撃でも雷撃でもやつてみたまえ。それでもし沈むようなことがあつたら、わしは燐製となつて、君の食卓の皿の上にのつてもよろしい。さあ、遠慮なく、沖合へ主力艦をくりだしたまえ』

博士は、磐石^{ばんじやく}の如き自信にみちていると見えた。

「大いによろしい」と大統領は口をとんがらかしていった。「では、余もこれから検^{けんぶん}分のために出掛けよう。おいシモン。建^{けんか}艦委員を非常呼^{ひじょうこしゅう}集して、試験場へくりだすようにそいえ。それから主力艦インディアナとマサチューセッツとを、すぐ沖合へ出動させよ」

命令を出すと、大統領は仕度^{したく}のため別室へ入つた。やがて彼は、

黒のオーバーに中折帽^{なかおれぼう}、肩から防空面^{ぼうくうめん}の入った袋をかけて玄関に立ち現れた。

「金博士、どうぞ」

大統領は、玄関に横付になつているぴかぴか黒光りに光つた自動車^{ゆびさ}を指して、そこに待つていた金博士にいつた。二人は車上の人となつた。

「オーケー。出発だ」

自動車は走り出した。と思つたら、とたんに、ぷすーつという音がして、がくんと横にかたむき、速度が落ちた。

「狙撃^{そげき}？」

と、金博士はちよつと不意打^{ふいうち}のおどろきを示した。しかし大統

領は割合わりあいにおちついていた。そして冬瓜とうがんのような顔をしかめていつた。

「どうも近頃のタイヤは、弱くて不愉快だ。なにしろ再生ゴムさいせいゴムだからな」

5

新鋭戦艦マサチューセッツは大統領とその幕僚ばくりょう、それに金博士を乗せると、沖合さして二十三ノットの速度でのりだしていつ

た。

「ルーズベルト君。この艦ふねはもつと速度スピードが出るのじやないかね」
 「うむ、それはその何だ、むにやむにや。あああれか。あれが博士ひきの率ひきいてきた驚きょう異軍艦ホノルル号か。うむ、すばらしい。全く浮かべるくろがねの城じょう塞うさいじや」

「うふふん、そうでもないよ」

「いや、謙遜けんそんに及ばん。余は、ああいう世界一のものに對して、
 最も愛好あいこうりょく力が強い」

と、ルーズベルト大統領は艦橋かんきよから身體をのりださんばかりである。

「さあ、どうか御遠慮なく、あのホノルル号を砲撃せられよ」

「やつてもいいのか。しかし……」

大統領が、いぶか訝しげに博士の方を振りかえった。

「どうぞ御遠慮なく」

「でも、実弾じつかんをうちこむと乗組員のりくみいんに死傷しごうが出来るが、いいだろうか。尤も死亡もつと一人につき一万弗ドルの割で出してもいいが……」

「弗は下がっているから、一万弗といつても大した金じやないね。とにかくそれは心配をしないでよろしい。早速砲撃でも何でも始めたまえ。早くキンメル提督ていとくに命令したがいいじやないか」

「キンメル提督？　ああ神よ、彼の上に冥福めいふくあれ。おい、ヤーネル提督、砲撃方始め」

「オーケー、フランキー」

と、そこで両洋聯合艦隊司令官ヤーネル提督は、電話機をとつて、砲撃命令を下したのであつた。

戦艦マサチュセッツとインディアナの四十センチの巨砲、併せて二十門は、ぎりぎりと仰角ぎょうかくをあげ、ぐるつと砲門の向きをかえたかと思うと、はるか五千メートルの沖にじつと静止している驚異軍艦ホノルル号の舷側げんそくに照準しようにんを定めた。

「照準よろしい」

報告が、ヤーネルの耳に届く。

「うん。撃て！」

提督は耳をおさえて云つた。

轟然ごうぜんと砲門は黒煙こくえんをぱつと吹き出して震動しんどうした。

甲板かんぱん

も艦橋も、壊されそうに鳴り響き、そしてぐらりと傾斜した。

「命中、五発！」

驚異軍艦のまわりには十五本の水柱が立つた。のこりの五発は、たしかに命中したとある。しかし驚異軍艦は、かすかに檣^{マスト}をゆるがしているだけで、穴一つ明かないばかりか、砲弾の炸裂^{さくれ}した様子もない。

「おい、本当か、五発命中というのは

大統領が、狐^{きつね}にばかされたような顔でヤーネルを睨みつけた。

「た、たしかに五発命中です。ですが、どうもふしげですなあ、炸裂しません」

といつているとき、驚異軍艦から左の方へ千メートルばかり放^{はな}な

れたところの海面か、どういうわけか、むくむくと盛りあがつて、それは恰あたかも、小さい爆雷ばくらいが海中かなり深いところで爆発したような光景ていを呈した。しかもそのむくむくは、勘定かんじょうしてみると、都合五つあつた。

「何だい、あれは」

大統領おどろは怪訝けげんな顔。

そこへ、さつきから置き忘れられたような金博士が、小さい身体をちよこちよことのりだしできて、大統領に耳うちをした。

「ええつ、そ、そうか！」

大統領の愕おどろきは一方ではなかつた。

「ふーん、命中弾は、たちまち艦内を通り抜けて、艦底から海底

へ突入、そこで爆発したのだというのか。こいつは驚異じや

「何ですって？」

と、ヤーネルが大統領の歎声たんせいを聞きとがめ、

「ああ大統領閣下。金博士ごとき東洋人にたぶらかされてはなりませぬ。第一おかしいではありますんか。命中したら必ず艦に穴が明くはず、穴が明けば必ずそこから海水が入つて、たちまち轟ご沈及至擊うちしないしげき沈となるはず。ですから、あんなに厳然げんぜんとしているはずはありませんぞ」

「わつはつはつはつ」

金博士が、あたり憚らぬ大声で笑い出した。

「これ金博士。あなたは司令官を侮辱ぶじょくなさるか」

「わつはつはつ、ヤーネル君。さつき君は、たしかに五弾命中と
 自らいつたではないか。それにも拘らず、今さら一弾も命中せざ
 るごとくいうのは何事だ。それとも、たつた五千メートルの距離
 から、静止せる巨艦を射撃して、二十門の砲手が、悉く中り外れ
 たとでも仰有るのかね。なんという拙劣な砲手ども揃いじやろ
 う」

「ああ、うーむ、それは……」

ヤーネルの赤い赭い顔が、急にカンバスの如く白くなつた。

金博士は、それ見ろといわんばかりに、提督の顔を尻目に見て、
 「さあ、ルーズベルト君、ぐずぐずしてては、また鋭敏なる
 日本空軍に発見される虞れあり。さあさあ次の砲弾を撃ちこむな

り、それとも爆撃でも雷撃でも、何でもさつさと早くやつたりやつたり』

と、金博士は只ただ一人なかなか機嫌がよろしく見えた。

大統領は、眼鏡てを掌ての中に握り潰つぶすと、居ても立つてもいられないという顔付で、

「こら、航空隊出動せよ。爆撃をやれ、雷撃もやれ。早くせんか」と呶鳴のなりたてた。

さあたいへん。大統領の激怒げきどである。ぐずぐずしてては、後の祟たたりの程たまもおそろしと、旗艦きかんマサチュセツツから発せられる総爆撃雷撃の命令！

と、忽たちまち近づく飛行機の爆音、來たなと思う間もなく西空にしそらは

夥しい爆撃機の翼が重り合つて真暗になつた。それが驚異軍艦の上まで来ると、袋の底が破れてその穴から黒豆がぽろぽろ落ちるような工合に、幾百幾千という爆弾がばら撒かれた。

と、忽ち起る爆発音と大水柱と大きなうねりとの交響楽！

巨艦の姿は、水柱の蔭に全く見えなくなつてしまつた。こんどこそは沈んだらしいと思つていると、間もなく水柱が、ざざーざつと海面に落ちこぼれると、あーら不思議、金博士の驚異軍艦ホノルル号の厳然たる姿が、神のごとくはつきり浮び出たではないか。

「ああつ、ちゃんとしている……」

嘆息と畏敬の声が同時に起る。

「三十八弾命中！」

と、空中からの報告が届いたのは、このときであつた。
「なんだ、三十八弾命中？ しかし、ホノルル号は顛覆もしないでちゃんと浮いているぞ」

と、大統領の嘆声。^{たんせい} そのとき金博士が傍へ近づいて、ホノルル号からすこし放れた海面において新たにばかりばかりと盛り上る大きな泡^{あわ}をさして、何やらいつて、ふふふふと笑つた。大統領は、蒼褪^{あおざ}めた長い顔をしきりに縦^{たて}にふつて肯^{うなづ}く。

「ふーん、三十八弾、いずれも甲板から艦底に通り抜けたか。しかも穴一つ明かず……。これは驚異じや。ハワイ海戦の前に、これ知つて居たらなあ。ちえつ、遅かつた」

と、大統領は、かぶつっていた帽子を手にとつて、両手でびりびりと引き破つた。

「雷撃機出動です」

ヤーネルが、蚊かのような細い声でいった。

しかし大統領は、もう雷撃にはなんの興味をもつていなかつた。何百本の空中魚雷をうちこもうと、到底とうていあの驚異軍艦を撃沈することは出来ない。今や彼の灼やけつくような好奇心は、かくも不思議な奇蹟を見せる驚異軍艦の構造の謎の只一点に集中されたのであつた。

「見せてくれ、あの驚異軍艦の中を！ わしは直ぐ、あれを真似すして百隻せきばかりこしらえるんだ」

大統領は、あえぎながら、金博士の胸^{むなぐら}倉^{ひにく}をとつて哀訴^{あいそ}した。
 「御覧になれば、なんだこんなものかと思われるですよ。はははは」

と、金博士は謙遜とも皮肉とも分からぬ笑い方をして、大統領をはじめ、建艦委員たちを案内して、驚異軍艦ホノルル号についていった。

艦には、ふしぎにも、水兵一人居らなかつた。そしてぶんぶんとゴムくさかつた。

「一言にしていえば、つまりこの艦は、艦体を厚いゴムで包んだものと思えばよろしい」

と、博士はひどく氣のなさそうな声でもつて説明を始めた。

「しかし本当は、もつと複雑な構造をもつてゐるんだ。今それをお目にかけよう。さあ、両傍へ分れてください」

そういうと、金博士は車のついた大きな電気メスをもちだして、甲板に当てた。すると甲板は火花を散らし、黒い煙をたてながら、まるで庖丁でカステラを切るように剪れた。博士はメスを置いて、こんどは高圧ブラストで、甲板の破片を海中へ吹きと

ばした。すると甲板の大きく切られた断面が人々の目の前に現れた。

「これ御覧。すてきに厚い 最良質^{さいりょうしつ}のゴムの蒲團^{ふとん}みたいなものじや。爆弾が上から落ちる。するとゴムの蒲團にもぐる。その間に爆弾の方向が鋼^{こう}鐵^{てつ}の艦体に平行に曲る。そしてそのまま走るから、鋼鐵の艦体の外側をぐるつと廻つて艦底に出て、そこでゴム底を突き破つて、爆弾は水中へどぼんと通り抜ける。な、分るでしようがな」

金博士は、大統領の顔を見る。大統領は大きく肯^{うなず}き、傍にいる建艦^{けんかん}委員の誰かの腕をつかんでゆすぶり、

「おい、君たちにも分るだろうな。よく覚えておくんだぞ。後で

このとおり作るのだから……」

「はい、大統領閣下」

「そこでこの爆弾の通過時間の長さじやが、もちろん时限以内のすこぶる短時間で艦外へ抜け出るようになつてゐること、それからこのゴムは爆弾で初めに穴は明あくが、爆弾が通り抜けると直ちに収縮しゅうしゅくして穴をふさぐから水を吸い込む余裕のないこと、この二点についてわしはちよつと苦心をしたよ」

博士は、かすかに溜息ためいきをついた。大統領閣下は、嵐のような長大息ちようたいそくをした。

「舷側げんそくを狙う砲弾や魚雷も、同じことに、ゴム蒲団の中をぐるつと方向をかえて、鋼鉄の艦体の外をぐるつと廻つて、艦底から

海底へ落ちる。今舷側を切つて見せてやるよ」

おどろいた構造の軍艦である。瞠目するアメリカ人を尻目に、博士は、こんどは電気メスをとつて、舷側をぴちぴちごしごしきり始めた。

舷側は、張板はりいたが二つに割れるように見事に切れた。しかし、あまり切れすぎて、吃水きつすい以下まで裂けてしまつたものだから、待つていましたとばかり海水がどんどん艦内へ突入してくる有様だつた。

「いや、そんなものに愕かなくてもよろしい。これ、わしの大事な説明を聞くんだ、ルーズベルト君」

「そうだ。ここが重要な個所だ。建艦委員、よく見、よく聞け」

「これがすなわち、さつき話をしたように……」

と、博士の説明が始まつたが、轟々たる浸水の音がとかく邪魔をしていけない。博士はそれにお構いなく喋りつづける。

一応の説明がすんだ。

大統領はもちろん、幕僚も建艦委員も共に金博士の智効の下に懼伏した感があつた。

「うむ、大したものだ。これを真似て、早速百隻の不沈軍艦をつくれば、日本海軍に太刀打出来ないこともあるまい」

「どうだ、気に入つたかね、ルーズ君」

「いや、^{おおき}大気に入りだ。^よ余は金博士を今日只今、名譽大統領に推薦することを全世界に宣言する」

「大きなことをいうな」

「そして金博士に贈るに、ナイアガラ瀑布一帯の……いや、瀑布のよう^に水が入つてくるわい。おや、艦^{ふね}がひどく傾いて沈下してきたが、まさかこの不沈軍艦が沈むのではあるまいな」

「この見本軍艦の用もすんだから、わしはもうこの辺で沈めて置こうと思うのじや。さあルーズベルト君。ぐずぐずしていると、

艦^{ふね}もろとも沈んでしまうよ。いそいで本艦を退去したまえ」

「え、それはたいへん。おい急ぎ引揚げろ。して、金博士、君は

「わしのことは心配するな。艦^{かん}載^{さい}機にのつて引揚げる。すつかり自動式のこのホノルル号に、水兵一人乗つていなから、わしが引揚げさえすれば、それでよいのじや。さらば、さらば」

大統領は命からがら沈みつつある不沈軍艦ホノルル号を退艦した。

後がワシントンに帰つてきたときは、出かけるときはちがつて、大した上機嫌じょうきげんであつた。

「さあ、余は百隻の不沈軍艦を、これから一年間のうちに所有することになるぞ。早速さつそく建艦命令きようめい 教書きょうしょを書くことにしよう。

おおヤーネルか、すばらしいじやないか。再生のわが不沈艦隊は……

「しかし……」とヤーネルは、不審の様子で、大統領のよろこぶ顔を見上げていう。

「不沈軍艦建造案は、たいへんよろしいですが、大統領閣下、それに使うゴムはどこから手に入れるのでございましょうか」「なにゴム？ ゴムは蘭印マレイから……いや失敗しまつた」

とたんに大統領は、蒼白そうはくになつて、椅子の上にのびてしまつた。一体どうしたというのであろう。壁間へきかんには、塗りかえられた旧蘭印きゅうらんいん、旧マレイの地図が、夕陽ゆうひを浴びて赤く輝いていた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1942（昭和17）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力・tatsuki

校正・門田裕志

2009年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

不沈軍艦の見本

——金博士シリーズ・10——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>